

既成財閥か、成金財閥か

— 大いなる失敗者 鈴木商店 —

安藤 良雄

台灣植民地を背景として、急速な成長をとげた鈴木商店は、第一次大戦の好景気に乘じて、既成財閥の三井・三菱に挑戦した。一時は三井物産をしのいだ鈴木も、戦後の恐慌の過程でついに倒されてしまった。その教訓のなかから、植民地と新興産業部門を地盤とした企業が、いわゆる新興財閥として形成されていく。

「三井・三菱を圧倒する乎」

「……今小生が聞かんとする所を左に示録すれば、今日船舶の黃金時代が戦後まで継続するものとせば凡そ何時迄継続すべき哉。戦後運賃界は如何に成行べき乎。

砂糖の商況は戦後如何に成行べき乎。戦後に於ける需要供給交遷の状態如何。

其の他米、豆、豆油、魚油、樟腦、薄荷、銅、錫、亜鉛、鉛等に就き現在の状況及戦後に於ける需用供給変遷の見込如何等。

又英米に於ける鉄の供給は戦局の如何に拘らず、継続し得らるるや。戦後に於ける需要供給の見込如何。

労銀が戦争の前と今日と何程の差を生じたるや又戦後労銀の見込如何。

造船費用は戦前と今日と又何程の差ありや戦後は如何に成行べき乎。

英國に於ける戦前と今日とを比較せる物価を送られたし但し指數に依るものにては駄目也。
即各種商品の高低表を見て今日迄未だ心付かりし金儲けの材料を得んとするにあればなり。英國如何に富めりと雖も今日の如き大戦を永くやる時は決極不換紙幣を発行するに至らん是吾人の最も恐る所此点に深く注意せられんことを切望す。

の要なき乎。

今後は日本米と豆の輸出を盛大にやらんと欲す。昨年の例に依るときは、米は満足すべき商売を為したるも、豆は甚だ不充分なりし。大に協力せられん事を望む。

(中略)

小川君持参の砲弾はロシアの注文にて、数ヶ月後より製造する予定也。

貴地にても仏國其の他より注文を得べし。……其の他此程の軍需品日本にて出来るものは注文をとる事甚だ面白かるべし……
今当店の為し居る計画は凡そ満点の成績にて進みつつ在り。御互に商人として此の大乱の真中に生れ、而も世界的商業に關係せる仕事に従事し得るは無上の光榮とせざるを得ず。即此戦乱の変遷を利用し大儲けを為し、三井・三菱を圧倒する乎。然らざるも彼等と並んで天下を三分する乎。是鈴木商店全員の理想とする所也。小生共はが為め生命を五年や十年早くするも縮少するも、更に厭ふ所にあらず。要は成功如何に在りと考へ、日々奮闘罷在り、恐らくは独乙皇帝カイゼルと雖も小生程働き居らざるべしと自任し居る所也。ロンソンの諸君、是に協力を切望す。小生が須磨自宅に於て出勤前此書を認むるは、日本海々戦に於ける東郷大将が、彼の『皇國の興廃此の一舉に在り』と信号したると同一の心持也。

大正六年十一月一日

須磨自宅にて 金子直吉

右の文章は、文字通り第一次世界大戦の風雲に乘じて、三井・三菱と争おうとする地位にまで飛躍した鈴木商店の総帥金子直吉（一八六六—慶應二年—一九四四—昭和一九年。當時五十一歳）が、須磨の自邸でしたため、高畠誠一商店長（日商社長等を経て現在同社相談役）はじめ、同社ロンドン支店幹部あてに書き送った書翰の一部である。（「金子直吉伝」より。以下とくに断らない限り、引用は本書と「柳田富士松伝」による）。「筆勢雄渾にして逸馬の如く、自由奔放に走つて其の丈二十一尺の長きにわたつた」というこの手紙は、得意の絶頂にあった鈴木商店と金子直吉、そして、戦争景気によいしれていた日本資本主義の姿をほうぶつとさせるものがある。

大戦期を通じ、輸出超過約一二億円、貿易外受取超過約一二億円、合わせて約二四億円の正貨の流入によって、未曾有の「繁榮」をかちえて、はなやかな「戦争景気」を現出させた日本資本主義は、三井・三菱・住友など、大財閥の資産を一举に膨張させたが、そのほか今なお、語り草となっている大小数多くの「戦争成金」をうみ落とした。しかし、この過程において、鈴木商店は「戦争成金」として数え上げるには余りにもスケールが大きく、また、日本資本主義にユニークな足跡を残した存在だったのである。

そしてこの鈴木商店は、第一次大戦後の恐慌（一九二〇—大正九年）、さらに、関東大震災（一九二三—大正一二年）で大きな痛手をこうむり、さらには、金融恐慌（一九二七—昭和二年）の発火点の一つとなり、しかも、この恐慌の結果、破産するというコースをたどり、まさに、大正年代から昭和初年にかけての日本資本主義の歩みを象徴しているが、また、みずからは、破産しながらも、北村徳太郎、大屋晋三、横尾竜、竹田儀一（以上実業界から政治家にもなり、戦後大臣にも就任した）、長崎栄造、田宮嘉右衛門、住田正一、六岡周三、高畠誠一、杉山金太郎、久村清太などといふ「人物」を残し、さらに、帝人、播磨造船（現在石川島播磨重工に統合）、神戸製鋼所、日本製粉、豊年製油、大日本セルロイドなど現在名門に数えられる「企業」を残すなど、ただ平凡に成功→没落の

鈴木商店のおいたち

コースを歩んだ事業とは、根本的にちがう特異な軌跡をえがいたのである。とくに、帝人は化学織維工業の先駆者であるとともに、第二次大戦後の花形企業の一つであり、播磨造船も、また、第二次大戦後、いくたびか進水量世界第一を記録した相生造船を擁し、現在の日本の代表的造船企業の一つである石川島造船播磨重工の母体となした企業である。

また、鈴木商店は、昭和年代に入つてから、にわかにクローナップされた新興コンツェルンの先駆的形態といった側面をも、もたないことはない。

こうしてみてくると、鈴木商店とその総帥金子直吉とは、「成功者」であるとともに、「大いなる先駆者」ともいってべきで、現在の時点でも改めて再検討に値する存在であろう。そこで、鈴木商店の発展と没落の過程とをたどってみよう。

いま、鈴木岩治郎と、彼の旧家であった辰巳屋（大阪で革細工の煙草入、砂糖、ヘッ甲、さんご等を取引し、とくに、開港後はジャワ糖の貿易と販売を行なっていた）について、詳しく述べる余裕はないが、鈴木が辰巳屋神戸店に雇われたとき、辰巳屋はすでに「開港景気」の波に乗って、阪神間貿易商の「旗頭」にまで成長していた。しかし、主人公松原恒七は中風で倒れたため、生前に大阪店を女婿の藤田東助、神戸店を鈴木岩治郎の両番頭にのれんわけ、ここに同じく辰巳屋を商標とする藤田商店と鈴木商店が生まれたのである。

金子直吉の登場

鈴木商店は、その後、砂糖のほか、外国貿易決済に要する銀貨ドルと、日本紙幣とを両替する銀仲買をも行なつて利を得た。

そのため、店主岩治郎は、銀仲買の為替業者が組織した「神戸取引所」の理事に選ばれた。これによつて、かつては文字通り一丁字も識らなかつた鈴木岩治郎もいわば阪神間の名士に加わつたわけで、さらに神戸取引所の後身「神戸商業銀行」（のち北浜銀行に合併）の頭取にも就任したが、一八九四（明治二七）年には、五四歳で世を去つた。

一八八五（明治一八）年には、柳田富士松（當時一八歳）、翌年に金子直吉（當時二〇歳）の両名が鈴木商店に入つたが、この二人の鈴木商店入りが、鈴木商店の波乱に富む将来の方向を決めたともいえよう。

柳田は鈴木岩治郎の旧主松原恒七庶系の令息（姻戚の養子となつた）という特殊な関係にあつたが、没後「頌徳碑」に「資性謹直質朴穩健ノ士……金子翁ガ天衣無縫ノ躍進ノ蔭ニハ常ニ翁ガ緊密周到ノ守備アリ」と記された人物で、後年、金子と「終生管鮑ノ交ヲナシ互ニ補佐」した。

金子直吉（一八六六二慶應二一九四四昭和一九年）は、高知藩免許商人（呉服、太物）の家に生まれたが、生家没落のため一〇歳前後には籠を背負つて紙屑買ひなどもしたようだが、砂糖商、質商、乾物商などに「奉公」したのち、彼が郷里で仕えた最後の主人傍土久万吉（はじめ質商、のちに砂糖商。後年金子の岳父となつた）の推せんで、神戸に出て鈴木商店に入ったのである。傍土家の番頭時代、砂糖の商売を身につけたが、この家の質屋時代には質物の書物を乱読して読み書きを覚えたようである。この金子は、没後の頌徳碑に「資性高潔、識見高邁、奇策縱横ノ士……鈴木商店ニ仕へ終生獻身忠誠を尽ス……」と記されているが、その後鈴木商店の中心となり、合名会社鈴木商店責任社員、株式会社鈴木商店専務、同系

列会社役員等を歴任するなど鈴木商店の総帥となり、一九二七（昭和二）年金融恐慌によつて、鈴木商店破産ののちも、その後身太陽産業を拠点として鈴木の挽回に当たつたが、一九四四（昭和一九）年、七七歳をもつて病没した。現在なお、鈴木商店を語る場合は、必ず金子直吉からはじめられるというほど、鈴木の象徴的存在となつてゐることは周知のとおりである。

以上鈴木商店のおいたちについて、やや詳しすぎるほど立ち入つて述べたが、それは鈴木が一方においては、三井・三菱・住友などとの旧財閥、他方では、日産・日窒・日曹・理研などの新興財閥（コンツエルン）とはそのおいたちを異にし、それが、鈴木の性格を相

当程度規定したからである。

日清戦争と鈴木商店

主人岩治郎が没した当時の鈴木商店は、すでに柳田、金子の両番頭の活躍などによつて、洋銀の売買、砂糖、樟腦、石油、小麦粉、寒天等の取引、皮革製造（葺合新川に工場を建てたが、間もなく大倉組に譲渡）など、と事業を拡大し、そのほか、樟脳油製造の研究なども行ない、「店の信用もようやくついてきて、やや成功の曙光が見えて來た」状態であったが、岩治郎の死によつて、一時は、店も存廃の岐路に立つた（岩治郎の遺産は九万円といわれている）。しかし、未亡人ヨネの希望によつて、事業の継続が決まり、ヨネの実弟西田仲右衛門（大阪の銀仲買商）が後見人、経営は金子、柳田の両番頭がヨネを補佐するかたちで行なうことになり、主な商品としては、金子が樟脳を、柳田が砂糖を担当した。なお、二代目岩治郎（一八七八二明治一年生）成人後は、金子直吉、柳田富士松、西川文蔵、森衆郎の「大番頭」、高橋半助、窪田駒吉、谷治之助、平高寅太郎の「四天王」、それに支店長が加わつた会議で重要事項が決定され、さらにヨネと岩治郎が出席して「最後の枢機」の決裁が行なわれたが、「女將軍」として、絶対的地位にあつたヨネは「一言の容嘴」もせず、実質上万事は、金子と柳田に委ねられていました。

た。

ところで、先代岩治郎病没の直後、日清戦争がおこり、この機に乗じて巨利をえようとした金子は、樟脳の投機で大失敗を演じ、鈴木商店も一時は、破産に瀕したが、金子自身の手腕でこの危機を乗りこえ、新領土となつた台湾への進出をはかつた。

台湾への進出は、鈴木躍進の跳躍台となつたと同時に、結果論からいえば、後年の命取りともなつたのであるが、金子は、積極的經營を展開し、台湾で樟脳油を大量に買付け、これを神戸に送つて、精製して欧米に輸出する方法で膨大の利益をおさめたのである。

後藤新平、台湾銀行への接近

しかしながら、鈴木の発展にとってより重要な契機となつたのは、

当時児玉源太郎総督下で台湾総督府民政長官の地位にあつた後藤新平への接近と、台湾における樟脳販売権の獲得であった。すなわち、一八九九（明治三二）年、台湾樟腦専賣法が制定されたが、同業者がこの専売に反対したのに對して、金子直吉は、後藤民政長官の専売方針に積極的に賛成し、専賣実施後は台湾貿易と二社で樟脳油販売権をえたのである。こうして、金子と鈴木商店は、政界・官界の大御所となつた後藤と親しくなるとともに、台湾産樟脳油の取引で圧倒的な地位を獲得したが、さらに、一九〇四（明治三七）年には住友経営の樟脳製造所を買収し、精製樟脳製品で巨利をうることとなつた。

台湾への進出、とくに、後藤新平、および、総督府と緊密化しての事業の拡大と、この間における台湾銀行との接近は、鈴木の事業発展にとって、決定的ともいふべき条件となつておらず、鈴木が「政商」と呼ばれるゆえんも、このあたりにあるといえよう。なお金子は土佐同郷の関係で、台湾銀行の副頭取中川小十郎（のち頭取、元

老西園寺公望の秘書ともなつた）、浜口雄幸（當時大藏省にあり、憲政会・民政党に入り首相となつた）などとも親しい関係となつたが、これが、後年の金融恐慌の問題に連なつていくのである。

神戸製鋼所の設立

この間、一九〇二（明治三五）年には、鈴木商店は、合名会社組織（資本金五〇万円）となり、金子が責任者（金子三六歳のとき）となつたが、この年鈴木商店直営最初の工場である薄荷工場が、神戸に設立され、翌年は門司郊外大里に製糖所を設立するとともに、神戸の小林製鋼所に投資することになった。

鈴木商店は、さらに、金子の手によって、一九〇五（明治三八）年、休戦の直後、この小林製鋼所をも買収し、神戸製鋼所と改称、その経営を田宮嘉右衛門に委ねたのである。これが最初の鈴木系大企業の誕生である。

一九〇九（明治四三）年には、前記大里製糖所を大日本製糖会社に六五〇万円（ちなみに鈴木商店の資本金は五〇万円である）で譲渡し、鈴木は、これによつて「一躍千万長者の列に加わる」と同時に、譲渡価格で一〇〇万円譲歩した代償といううことで大日本製糖の北海道、九州、山陰、山陽、朝鮮における一手販売権を獲得した。この取引に當たつた金子の手腕には調印のさい同席したのちの「ビル王」馬越恭平をも感嘆させたそうであるが、この六五〇万円が鈴木商店財界雄飛の元になつたのである。げんに、鈴木商店は明治末から第一次大戦までの間（一九〇九明治四二年～一九一三年正月）に前記のほか、東工業、大日本塩業、合同油脂、日本商業、北港製糖、大里製粉所、帝国ビール、東亜煙草、札幌製粉、東洋海上火災、普蘭田塩田（関東州）、日本酒類醸造、日本酒精醸造、日本輪業、山陽電気鉄道、大正生命保険、日本教育生命保険の各社を設立してレパートリーをいちじるしく広め、コンツエルン的形態を整えるにいたつていた。

第一次大戦と鈴木

第一次大戦は周知のよう、鈴木躍進の好機となつたが、まず、大戦ばつ発直後、金子直吉は、貿易業界、海運業界をきゅう合して

政府に働きかけ、緊急勅令で戦時海上保険補償令を公布させたのである。金子と鈴木商店とはすでに、政治的発言権をすら強めていた。

金子直吉に統率された鈴木商店の大戦中における、雄飛ぶりは、前掲金子書簡のとおりだが、その本領は、開戦直後の低迷時（開戦直後の日本経済はむしろ開戦ショックによって半恐慌状態を現出した）に、事業界全般が前途の見通しが、たたないままにしゅんじゅんしていたのに対して、金子は、世界の商品、ことに軍需品は必ず暴騰するにちがいないという判断の下に会計主任に命じ、『今日以後は、鈴木の信用と財産とを充分に利用してできるだけの金をこしらえ極度の融通をはからせてもらいたい、またいかに引きづるとも、自分の戦闘力をにぶらせるようなことはいってくれるな、めくら滅法だ、まっしぐらに前進じや、いよいよいかぬときは俺だけにソツといえ、鈴木の大をなすはこの一挙にある』といい渡し、すべての商品、商船に対して一齊に買思惑を立てたのである。

これに対して「世間では、金子の冒險的買占めを見て、金子は気が狂つたかと笑つたほどであるが、金子の先見は果してあやまらず、買占めをはじめて三、四カ月を経過した大正四（一九一五）年の二、三月頃から物価は暴騰をはじめて景気が立直り、鈴木商店は一挙に数千万円の巨利を博した」というわけである。この場合金子は、とくに、いちばん戦争によつて鉄の需要がふえ、海運が活躍すると判断し、まずイギリス、ついでアメリカの鉄を買占め、三菱造船に一度に三隻も注文した。

興味あることは、第一次世界大戦で鈴木商店とならぶ躍進を示した川崎造船（松川幸次郎）も鋼材の供給は鈴木に仰いだほか、三菱造船、石川島造船所、大阪鐵工所等大戦景気でスター的役割を果した代表的造船所は、すべて金子商店から鋼材の供給を受けたのである。

大戦中（一九一四—大正三—一九一八—大正七年）、鈴木商店は新たに南洋製糖、日本金属、播磨造船所、神戸沖見初炭坑、六十五銀行、日本セルロイド、日本クロード式窒素肥料、帝国染料、大連とその友人で米沢高工の教授だった秦逸三に研究成果を事業化し、

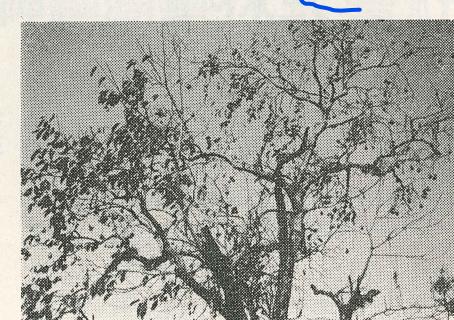
長生きしたい人のしおり

高 畑 誠 一

二重柿／高知県安芸郡田辺町にある、柿の実の中に二重に

実のある珍らしいもので、日本で

たつた一本あるという。



第一次大戦終了後も、鈴木は事業を拡げ、一九一九（大正八）年正九）年資本金を五〇〇〇万円に増額し、その事業範囲も、金属、造船、人絹、毛織、セルロイド、窒素肥料、染料、皮革、製糖、製塩、製粉、製油、樟脳、ゴム、ビール、マッチ、アルコール、タバコ、海運、倉庫、保険、ゴム栽培（ボルネオ）等に多角化し、そのレパートリーは既成財閥に伍するまでになったが、とくに、第三国間貿易（出貿易）では、三井、三菱をしのぐ取引高に達したといわれている。

なお、終戦後の海運界の不況を救済するために、国際汽船株式会社

帝國人造絹糸の設立

寸、帝国樟脳、支那樟脳、長府土地等の諸社を設立、台湾炭業、南朝鮮鉄道、東洋ファイバー、浪華倉庫、信越電力、大田川水電等の諸社の設立に出資し、横浜、清水、鳴尾に製油工場を設けた。村の唐畠村長が創設したものを作ったものであるが、神戸製鋼所と原材料関係も深いので、一時その造船部となつたこともあって米丸と命名されている。

このうち、播磨造船は、一九一〇（明治四三）年頃、兵庫県相生にて、日本をゆるがせた米騒動（一九一八—大正七年、鈴木商店も米の買占めを行なつたということで焼打ちにあった）があるが、ここではこれらに立入らず事業についての叙述をつづけよう。

TEISHO

帝人商事株式会社

輸出入・国内販売

高 畑 誠 一

二重柿／高知県安芸郡田辺町にある、柿の実の中に二重に実のある珍らしいもので、日本でたつた一本あるという。

本社 大阪市東区南本町一丁目一三番地
支店 東京・福井・足利
営業所 名古屋・京都・三原・岩国・松山・徳山